

心身障害発生防止のための小児保健環境学的研究

総括研究報告書

主任研究者	木村 三生夫	東海大学医学部小児科	教授
分担研究者	須川 豊	神奈川県立栄養短期大学	学長
	内藤 寿七郎	日本総合愛育研究所	副所長
	沢田 啓司	日本総合愛育研究所	研究第3部長
	福山 幸夫	東京女子医科大学小児科	教授
	大田原 俊輔	岡山大学医学部小児科	教授
	巷野 悟郎	東京都立府中病院	院長
	前川 喜平	国立大蔵病院小児科	医長
	高石 昌弘	国立公衆衛生院	室長
	今村 栄一	母子衛生研究会	理事
	榊原 悠紀田郎	愛知学院大学歯学部	教授
	高久 功	長崎大学医学部	教授
	原 一郎	大阪府立公衆衛生研究所労働衛生部	副部長
	木村 三生夫	東海大学医学部小児科	教授
経理事務担当者	高倉 巖	東海大学医学部小児科	助教

幹事	福山 幸夫	東京女子医科大学小児科教授
"	高石 昌弘	国立公衆衛生院室長
"	巷野 悟郎	東京都立府中病院院長
"	沢田 啓司	日本総合愛育研究所研究部長
評価委員	蒲生 逸夫	兵庫医科大学小児科教授
	林 路彰	国立公衆衛生院母性小児衛生学部部長
監事	今村 栄一	母子衛生研究会理事

研究の目的

心身障害の発生要因は極めて多岐にわたる。本研究は小児保健環境学的立場よりその発生要因、発生の実態を検討し、発生予防および知療方針の探究を行うことを目的として以下の事項について研究を行った。

(1) 先天異常の成因および乳幼児の発育過程における疾病障害などの追跡的研究

分担研究者 須川 豊

約15,000人の乳幼児を妊娠中から生後数年にわたって健康状態を追跡調査し母親の生活条件をはじめ、児の発育状態および疾病の記録をもとにして、先天異常の成因を解明しようとするものである。

今年度は先天異常と確定されたもの、および脳性まひや外表奇型のごとき特殊な疾患と対照群について、母の環境および妊娠中の条件などの比較検討を行う。同時に小児の身体発育と健康状態、さらには妊娠中の母の条件、その後の生活環境との間の関連を研究し、総括的な検討を行い、母子保健ケアシステム、先天異常発生防止施策を考究した。

(2) 先天股脱予防に関する研究

分担研究者 内藤 寿七郎

沢田 啓司

先天股脱は先天的な素因に加えて、出生後の股関節の扱い方により発症がうながされる。したがって従来の早期発見、早期治療より一歩進めて、発症予防をする必要があり、これはまた可能である。昨年度までの研究成果をもとにして今年度は股関節の保護に関しての股脱予防指導の効果判定を行い新生児期、乳児期の股関節検討システムを作製した。

(3) 小児のけいれんに関する研究

① 治療に関する研究

分担研究者 福山 幸夫

けいれん性疾患は一般小児人口の約10%に達するとく、極めて頻度の高いものである。け

いれんは脳異常の現われであるとともに、適切な処置をしないと後遺症の危険がある。けいれんの治療法は現在着実に進歩しつつあり、抗てんかん剤の血中および各種体液中の濃度の測定より発作型分類別に予後、薬物治療法の治療成績を検討する。また、難治性てんかんに対する特殊療法の研究を行った。

② 成因および予後に関する研究

分担研究者 太田原 俊 輔

小児神経疾患とくに小児てんかんは極めて多いものであるが、その疫学的研究についての検討は乏しかった。これまでの研究によって罹病率を明らかにしてきたが、今年度はさらに詳細な疫学的調査を行い、長期追跡研究より予後の実態を解明する。

また、熱性けいれんの実態調査より、頻度、罹病率 成因の検討を行うとともに、予後てんかんと関連を追究した。

(4) 小児の微症状を指標とした心身障害の

早期発見方法に関する研究

分担研究者 巷 野 悟 郎

心身障害の早期発見のため、小児に現われる微症状に注目した。心身障害児は体温中枢が不安定のため、体温が動揺しやすい傾向が想定される。このために健康小児および心身障害児の体温を詳細に観察し、諸種要因との関連を検討して心身障害の早期発見の資とした。

(5) 小児の精神・身体発育からみた

心身障害の早期発見方法に関する研究

① 精神身体的発育

分担研究者 沢 田 啓 司

心身障害の早期発見のためには正常小児の身体発育像を明らかにする必要がある。正常小児の精神身体発育については横断的研究はあるが縦断的研究は乏しく、また、乳児期および幼児期における養育環境、特に母性的養育環境の相違がその後の身体発育に及ぼす影響について研究を行う。また、幼児学童の体力運動能力測定法の作成を前提として文献的考察を行った。

② 神経学的発育

分担研究者 前 川 喜 平

乳児期を通じてみられる反応、姿勢のおおよその発達は解明されているが、細かい正常発達と

異常との差異は標準化されていない。乳児期を通じてみられる反応や、発達にともなう姿勢についての研究より、各月令別の反応、姿勢のパターンを標準化し、乳児検診の場において検討し、心身障害児の早期発見に役立たせようとした。

(6) 心身障害の原因としての小児の事故に関する研究

分担研究者 木村 三生夫

小児の事故は小児期の死因のトップを占め、極めて大きな問題であるが事故の後遺症の実態についてはまとまった研究がなされていない。心身障害発生防止の立場から事故の現状をまとめ、対策の資とすることが必要である。このため初年度内は神奈川県における諸種の事故の実態を調査した。

(7) 健全育成の立場からみた幼児の肥満（傾向） の実態とその対策に関する研究

分担研究者 高石 昌弘

肥満（傾向）については従来学童期を対象とした検討が多かった。しかし肥満（傾向）の発生要因とその対策については幼児期の発育経過を配慮して経時的に検討する必要がある。このため、幼児（主として3-4才児）の肥満傾向の実情を把握し、肥満に関する身体計測の基本的検討を行い、判定基準案を作製し検討した。

(8) 離乳食、幼児食に関する研究

分担研究者 今村 栄一

離乳に関する研究は昭和33年の文部省科学研究、離乳研究班により基準が出されて以来、大きな検討はなされていない。その後20年を経た現在、幼児食を含めて離乳食の新しい基準を作ることは必要であり、これにより離乳期、幼児期の健全な発育を図る。

前年度は離乳基本案を中心とし離乳の問題点の検討を行ったが、今年度はひきつぎ問題点を明らかにするとともに基準案作製のための基礎的研究を行った。

(9) 乳幼児の歯科保健に関する研究

分担研究者 榊原 悠紀田郎

近年、乳幼児における歯科保健の重要性が高まってきており、乳幼児のう歯罹患のパターンを解明し、有効な公衆衛生対策をたてることが望まれ、これを実現すべき地域保健組織の枠組みを確立する必要がある。前年度の結果をふまえて乳歯う蝕罹患型分類についての基準設定、小都市における乳幼児歯科保健管理の研究、僻地における乳幼児歯科保健計画についての研究を行った。

(10) PCB汚染地区の母親とその児に関する研究

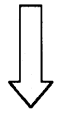
分担研究者 高 久 功

いわゆる油症事件が発生して以来10年を経過したが、PCBの影響はいまだに根強く存在している。油症患者の対策も必要であるが、同時にPCBの妊産婦およびその児の健康に対する影響を監視することは重要である。このために本年度は油症児の症状、精神発達状況についての追跡研究、PCBの母体、胎児への影響、油症児の歯科、眼科、皮膚科学的検討を行った。

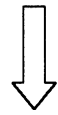
(11) PCB取扱い婦人とその子供の健康に関する研究

分担研究者 原 一 郎

PCB取扱者では取扱い中止後も数年以上にわたって血中PCB濃度が高い。血中および母乳中のPCB濃度は高い相関を示し、PCB濃度の高い母乳による授乳児の健康状態を調査する必要がある。このためPCB取扱い婦人とその子供の健康状態の追跡調査研究を行うと同時にPCB蓄積の影響を検出する新しい検査項目の検討を行った。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究の目的

心身障害の発生要因は極めて多岐にわたる。本研究は小児保健環境学的立場よりその発生要因,発生の実態を検討し,発生予防および知療方針の探究を行うことを目的として以下の事項について研究を行った。